

露伴〈心のあと〉考（後）

日 沼 滉 治

四 風流悟―魔王【一部再掲―錯雑修訂】

すでに透谷の風流観については、透谷研究の側面から、新資料の発見²¹⁾をはじめ諸家の論がある。それらを露伴の風流に即して顧みれば、兩人の次の諸作に注意が向くのである。²²⁾

露伴 一碗の茶を忍月居士に侑む^(すま) (明23・4・30『読売新聞』)

露伴 風流悟 (明24・8・13『国民之友』第二百二十七号付録、「藻塩草」、雷音洞主)

露伴 虚子が言について (明24・8・19～20～21『読売新聞』、雷音洞主)

露伴 「虚子が言について」について (明24・8・29『読売新聞』、雷音洞主)

露伴 新葉末集 (明24・10・21、春陽堂)

露伴 五重塔 (明24・11・7『国会』、其一)

露伴 すきなこと (明24・12・7『後の月影』所収、春陽堂)

- 透谷 伽羅枕及び新葉末集（其一）（明25・3・12『女学雑誌』甲の巻、第三〇八号）
- 露伴 五重塔（明25・3・18『国会』、其三十一（現、其三十二））
- 透谷 伽羅枕及び新葉末集（其二）（明25・3・19『女学雑誌』甲の巻、第三〇九号）
- 露伴 五重塔余意（明25・4・12『国会』其一（現、其三十三））
- （明25・4・17『国会』其二（現、其三十四））
- （明25・4・19『国会』其三（現、其三十五））
- 透谷 松島に於いて芭蕉翁を読む（明25・4・23『女学雑誌』甲の巻白表、第三一四号）
- 透谷 後の月影（明25・4・23『女学雑誌』甲の巻白表、第三一四号）
- 透谷 我牢獄（明25・6・4『女学雑誌』甲の巻白表、第三二〇号）
- 透谷 〔雑報〕三日幻境（上）（明25・8・13『女学雑誌』甲の巻白表、第三二五号）
- 透谷 〔雑報〕三日幻境（下）（明25・9・10『女学雑誌』甲の巻白表、第三二七号）
- 透谷 風流（明25・12・1『青年文学・鳳雛』、明25・4（5月執筆か））
- 透谷 尾花集（露伴子）（明26・1・14『女学雑誌』甲の巻白表、第三三六号）
- 露伴（雷音洞主）の「一碗の茶を忍月居士に侑む」は、芭蕉・西行、特に禅僧の売茶翁（一六七四～一七六二）の風流を引いて石橋忍月にむくいた論である。その中に「般若心經第二義諦」の文字が見え、「居士知るや古人句あり、風流の初や奥の田植歌と。我はいまだ能く蕉翁が風流の用心を知らねど、」という一節がある。透谷の「松島に於て芭蕉翁を読む」に先立つこと二年、いわゆる露伴の心的動揺を物語る文章である。つづく雷音洞主

「風流悟」を引こう。

恋と名のついたるものは即ち牢獄なるか。（略）我はむしろ我が正一位たり公爵たり、地球上最も貴き家の子孫たり、絶倫の美男子たり、無類の話し上手たり、金欄緞子につゝまるゝ人たり、家に千萬金を積むの財産家たらむことを願ふよりは、却て彼女が我と同じく夢の化石世界に於ける劣等者にてあらむことを冀ふものなり。（略）然しながら彼女は病に罹りし、我は常に其癒えんことを祈りし甲斐なく彼女は今は亡し。然れども彼女は最期に於て我が恋に感じたりし、我が頭上に極めて深き愛情の籠りたる眼の光りを澆ぎたりし。我は見ざる語らざる恨まざる、而して長く忘れざる恋をなしたり、世人が見て成らずとなせるところの恋をなしたり。今も尚ほ恋の牢獄の裏にあつて生活せり。此牢獄と名のついたるものは即ち常に、今も存せる彼女と我とが手を携へて逍遙するところの樂園なり。牢獄は即ち樂園なり、蛇の居らざる樂園なり。

一読して『露団々』におけるルビナーシンジアの純愛や『風流仏』（明22・9・23、新著百種5、吉岡書籍店）の仏師朱蓮の境涯が連想される。これが「凶悪勇悍妖怪佞毒」や「戦争自殺淫猥偷盗」（『露団々』例言）をひそませていたことは、高浜虚子「風流悟」評にかみついた雷音洞主「虚子が言について」につけば明らかであろう。ひたすら嘲罵・諷刺・悪態、いわゆる東洋風江戸っ子風の花鳥風月のよすがもない。つづく「虚子が言について」に至っては、ただただ陰しく、題名からしてくどくどしく毒念を封じ込めようとして封じかねた文であり、生前の単行本にも全集にも収められなかったものである。その露伴「風流悟」が透谷の「我牢獄」の主題へと展開したことは、両者の先後や優劣の問題ではあるまい。透谷自身が「旧作」と言い「今日の

余の思想とは異なるところ」と後記している。露伴に一年四ヶ月遅れる二五年余の生涯を疾走して去った、その振幅にこそ透谷の悲しみと天才とが認められなければならないだろう。

雷音洞主の風流は恋愛を以て牢獄を造り、己れ是に入りて然る後に是を出たり、然れども我が無風流は牢獄の中に捕繋せられて然る後に恋愛の為に苦しむ、我が牢獄は我を殺す為に設けられたり、我も亦た我牢獄にありて死することを憂ひとはせざれども我をして死す能はざらしむることもせず、空しく我をして彼のデンマルクの狂公子の如く、我母が我を生まざりしならばと打ち啣たしむるのみ。（我牢獄）

加えて言うならば、透谷が露伴の「すきなこと」に「随喜」して書評「後の月影」を書き「風流」を残したことにについては今日、報告と考証がある。

しかし逆に露伴が透谷の文章に激発されることがなかったらうかという疑いがある。激発させられることがあったと考えたい。連載「五重塔」は塔の竣工を前にして作中に嵐をはらんだまま、明治二五年三月一八日の掲載以後ほとんど一ヶ月中断された。透谷「伽羅枕及び新葉末集」、とりわけ「其二」（翌一九日）の直後からであったことに注意したい。透谷の征矢は露伴の肺腑を衝いた——。そのことを認めたい。そして、連載が再開するやたちまち飛天夜叉王の嘲罵と咆哮は無明の長夜を疾駆した。露伴の小説は一瞬、魔王蹶起する劇詩の高みを翔けあがり、三回で終息した。

五 出廬

長篇詩『心のあと 出廬』は明治三八（一九〇五）年三月一五日からその年の一二月三一日まで『読売新聞』

に掲載された。いわば日露戦争のさなかに公表された新聞連載詩編であり、一個人の未完の詩集「心のあと」全巻の序として長大に過ぎており、題名にも屈折がある。いったい「出廬」という題名の含意するものは何であつたのだろうか。

その構成と内容については、のちに露伴自身が「初版引」⁷⁰に記している。それによれば四篇より成り、

第一篇は「世の悦ぶに足らぬ」をいい、

第二篇は「詩の愛すべき」を叙し、

第三篇は「空に遊ぶもまた竟に実在の累するとなるを免れざる」を述べ、

第四篇に「詩と世と共に悦び愛すべく、実在と空想と相即き相容るべき」を映じた

という。時局がら出廬して国策に協力しようなどというものではない。

たとえば第三篇では廬の外の声が主人の耳に聞こえてくる。それと明示してはいないが、日露戦争が起きたことを思わせる世間の騒がしさである。廬の近くを行く船客の歌、また児童のうたう軍歌。詩神に心を捧げる廬の主も心みだれ、その形と影のあいだで深夜に問い、かつ答える。第四篇では、窓の外を行く若き人、ついで客詩人との応酬があつて、主人は出廬を決心する。

小さき廬^{イホリ}！。いほり 何せん！

いほりを出で、眼をあげて見て、

太平の世は 笑みて歌ひて、

戦ひの日は 戦ひの日の

すがた留めて 歌を残さん！

実在も歌。空想も歌！。

小さき廬！ 廬 何せん！

ただし、外山が十年前に説いたような、軍歌を作ろうというのではない。

我がまだ知らぬ 八千草の

花の色香を 尋ねくゝて

歌ひ歌ひて 神にむくはん。

詩の神にむくいようとする「出廬」とは何か。篇の章と節、律調の大体、および目に立つ詩句を掲げ、全四篇九一章三七七節三七〇〇行を越える詩集全体の構造を俯瞰しよう。

第一篇（「世の悦ぶに足らぬ」こと）一五章七二節

第一章 （三節・七七調） 大河のほとり、柳の老樹、廬の中

第二章 （二節・七五調） 時知らぬ花、廬に祭れる神

第三章 （二節・七五調） 常住の月、廬にまつれる神や何

第四章 （六節・七五調） 老のやつれ、人の世、我が神の不老の郷

第五章 （十三節・七七調） あぢきな人の世、嬉しやこゝに不老の国、照陽殿

第六章 （一節・七五調） 洪荒の世、女蝸氏、石のいろく、天を補い

第七章 （二節・五七調） 白き石、彩色の母、「真理」

第八章	（三節・七七調）	青き石、色の姉、「仁」 ^{ナサケ}
第九章	（四節・七七調）	紅き石、歡喜の色、華美の色、「美」 ^{アカ}
第十章	（九節・七七調）	黄なる石、氣位高き色の兄、「希望」 ^{ノゾミ}
第十一章	（八節・破調）	黒き石、色の父、「強力」 ^{ツヨサ}
第十二章	（十五節・七七調）	遺されし、色の弟、水色の石、色の無き、「長久」 ^{トキハ}
第十三章	（一節・七七調）	女蝸氏このかた、現世終に頼むべからず ^{ウツシヨ}
第十四章	（二節・七七調）	現世に眼をば背向けて、廬に友、柳客あり、姓は陶 ^{ヤナギ}
第十五章	（三節・破調）	現世のいふにたらぬを、これの廬、柳、心しずかに ^{イホリ}
第二篇（「詩の愛すべき」こと）三三章一〇〇節		
第一章	（三節・各調）	現身のいふに足らず、我籠りける、廬のうしろの柳 ^{ウツシメ}
第二章	（二節・七七調）	現世は影にも似たり、現身は我を苦しむ
第三章	（三節・七七調）	五尺の此の身、囹圄ならずや、窓五つ（五感）、人 ^{ヒトヤ}
第四章	（八節・各調）	自己が技巧、「人の世」、結節、網、我、結節一つ ^{オノワザ}
第五章	（三節・七七調）	空想よろこびつべし、鳥の飛ぶ道、長く留存まる ^{ムスビメ}
第六章	（二節・七七調）	実在や何、空想や何、自他迷ふ五七十年 ^{ワレヒト}
第七章	（二節・七七調）	白髪 ^{フタリ} の二人の翁、碁を囲む、石子は借物 ^{イシ}
第八章	（二節・七七調）	隠士 ^{ヒネモス} 尽日鯉を釣る

第九章 (二節・七語調)

魚・石子^{イシ}忘るべし、空想ひとり楽しみつべし

第十章 (一節・七七調)

実事は積んで歴史、空想凝って詩歌、詩歌のかをり

第十一章 (二節・七五調)

我が踪跡^{アト}、人間の歴史、浜の千鳥の足跡ぢやまで

第十二章 (六節・七五調)

世に事実ほど虚妄^{ウソ}なるは無し、歴史が何の！

第十三章 (二節・各調)

うき世の人のおろか、我が懷中^{フトコロ}の珠を忘れつ

第十四章 (二節・七七調)

歴史の神像^{カミ}、里の童児^{ワラベ}「史家」、槌^{ツチ}を手に、鉛の像

第十五章 (一節・七七調)

詩歌^{シイカ}の神は愛に満ちたる

第十六章 (五節・七五調)

鳴門の船路、沙漠の旅、我堪へず、我倦みぬ

第十七章 (一節・七語調)

世念^{セイン}失せて詩をおもふ、廬^{イホ}にいつく 歌の御神^{ミカミ}や

第十八章 (五節・七五調)

心は火、身は燃材^{タキモノ}、現身^{ウツシ}何ぞ、詩歌の神御国恋しや

第十九章 (二節・破調)

歌をおきてあだし心を我有たば

第二十章 (七節・七五調)

浮世の富、山車^{ダン}の牛、山田鋤く牛、我、詩に富まん

第二十一章 (七節・各調)

現世^{ウンヨ}の名、ゑびむし・蛇のぬけがら、詩仙例あり

第二十二章 (九節・七五調)

雪山、婆羅門^{バラモン}、醍醐^{ダイゴ}の乳牛、詩に入って恋価値あり

第二十三章 (二節・各調)

貧は士の常、ひそかに傲る廬^{イホ}の中、独り住

第二十四章 (三節・七五調)

深山の桜、楨^{イホリ}の柱に寄り、廬物寂び世と遠し

第二十五章 (一節・七五調)

空を結んで文^{アヤ}を、音楽^{ガク}の神趣、浮世の恋を厭ひ棄つ

第二十六章（一節・七五調）

我たゞひとり詩をおもふなり

第二十七章（六節・七五調）

詩神を笑ます才無きを慚づ、嬉しや月に情はあり

第二十八章（二節・七五調）

厭^{イヤ}や桜、厭^{イヤ}や恋、空想の神なつかしや

第二十九章（二節・七五調）

仏陀^{ホトケ}の道は肯^{ウケガ}はず、詩の神をたゞいつく

第三十章（一節・七五調）

詩の神、不老の門の春、花、月、泉、美人、勇士

第三十一章（一節・七五調）

梵王宮の春の色、空想の里、弾指の間に皆現じ出て

第三十二章（一節・七五調）

我が神に我捧げなん、廬は出まじと、思ひきわめぬ

第三十三章（三節・各調）

廬前の川、廬後の柳、閑窓に倚^ヨる

第三篇（「空に遊ぶもまた竟に実在の累するとなるを免れざる」こと）一二三章一二八節

第一章（三節・破調）

俄に聞ゆる物の音、人の声、西方^{ニシ}に敵あり、仇あり

第二章（一節・七五調）

耳を塞ぎて、有無の間に詩をおもふ

第三章（五節・五五調）

小舟^{ラフネ} 今来て、歌の声する、いでや聞かうよ人の歌

第四章（三十節・七五調）

船客の歌、劫運の風、満州の原、老翁^{オウ}、立たうかや

第五章（三節・七五調）

漕がざる舟の、去りにけり、他^{ヒト}かや、我に似たるよ

第六章（一節・七五調）

王土、劫運の風、小雀の嘆き敢てせず、我が心動く

第七章（一節・七五調）

苦舟の人の歌何すべき、神の玉の御声を聞かんのみ

第八章（七節・各調）

我いとけなき、知りえたり、花は、詩はおのづから

第九章 (七節・七五調) 我たゞ花を待ちぬべし、我園守と身をなさん

第十章 (四節・七五調) 吾が廬を出でゝ何処に、何為さん

第十一章 (一節・七語調) 詩を招び下す、香の煙、江村の暮、五位鷺渡る

第十二章 (五節・七五調) 里の児童の一ト群、軍歌

第十三章 (十九節・破調) 児童の唱へる歌「打てや打てく総軍ふるふ勝戦」

第十四章 (二節・七五調) 去る子等

第十五章 (一節・七五調) 廬は灯一つ、人一人

第十六章 (二節・七五調) 我に友、「影」うなだれて物おもふ夜

第十七章 (二節・七七調) 影「汝の心あはれ震動よ」、形「汝愁へず」

第十八章 (四節・七五調) 影「汝、国土の縁に引かされて、汝のため愁ふ」

第十九章 (九節・各調) 形「我は地の人よ、汝は天より、やまとの民」

第二十章 (六節・各調) 形影(唱応)「生り出でし最初異なり、互に悩む」

第二十一章 (三節・七五調) 形影(唱応)「汝は重き地の人、汝は軽き光の児」

第二十二章 (一節・七七調) 我「影」を抱けば「影」我を抱く、残れるおもひ

第二十三章 (九節・破調) 馬悲しめど、女泣けども、棄てられぬ詩の神に

第四篇 (「詩と世と共に悦び愛すべく、実在と空想と相即き相容るべき」こと)

第一章 (十節・各調) 若き人の歌、愛国の歌、何になる星よ董よの歌

- 第二章 (一節・七五調) 形影「外の声、神の御歌を輕しめて、うとましや」
- 第三章 (一節・七七調) 形「詩の神いつく此の廬の前、神を黷すな」
- 第四章 (一節・七五調) 若き人の言「歌の神去れ、李太白、淵明を嘲みし」
- 第五章 (一節・七五調) 形の言「おのれはおのれ、君は君、君たゞ過ぎよ」
- 第六章 (一節・七七調) 影の言「狂士去れく、歌ならぬ歌、歌嫌ふべし」
- 第七章 (十節・五七調) 若き人の言「蝸牛、籠り居、蔵六、我は去らなん」
- 第八章 (一節・七語調) 人も去りてはなつかしく、廬音無く更け行けば
- 第九章 (六節・各調) 客詩人の歌「廬あり、この人も詩をやおもへる」
- 第十章 (二節・七七調) 主客、主「酒盞酒にあへる哉、廬に入りませ」
- 第十一章 (一節・七七調) 客「廬物無く、人詩を語る、おかしき人の戲言や」
- 第十二章 (四節・七五調) 主人の言「詩は酒、地にそゝがせじ君が酒」
- 第十三章 (七節・七五調) 客の言「君が酒卮美しき、我に友あり、彼あらば」
- 第十四章 (二節・七五調) 主「若佼の過りにき」、客「なととどめざりしぞ」
- 第十五章 (二節・五五調) 主の言「我詩をおもひ、彼世をおもふ、互に離れ」
- 第十六章 (三節・七七調) 客の言「詩は鏡、世をほかにして詩あることなし」
- 第十七章 (三節・七七調) 主の言「勿怒りそ君、詩はたゞ無かれ世の臭味」
- 第十八章 (十七節・七七調) 客の言「詩は大なり、八方を見よ、歌は成るべし」

第十九章 (五節・七七調) 主の言「悟りたり、天地はすべて歌の御神の御殿」ミアラカ

第二十章 (一節・七五調) 八千草の花の色香を歌ひくゝて神にむくはん

篇と章と節、および詩句の総体から見ていわゆる抒情詩というよりも叙事詩、むしろ劇詩のおもむきが強く、このことはのちに検討したい。さきに律調についてひとわたり触れれば、総体として文語定型詩であり、七五調を基調にしている。ただし五七調・七七調・五五調を使い分け、破調もあえて試みたようであり、頭韻や脚韻を表だつて踏むことはない。詩句の繰り返しによつてそれに近い効果を期し、脚韻も単調さを避けたようである。たとえば第一篇第一章の第一節を挙げよう。

おもしろや、あら、おもしろや！。

みなもと遠き 大河の

水は流れて 物言はず、

やさしく地をツチ 潤して、

ゆるく去り行く 其の姿！

第一行目の音数は「五・二・五」であり、五七調にも七五調にもなりうる律調である。

「おもしろや」の繰り返しが頭韻・脚韻を踏んでいることは見るとおりである。各行の脚韻は一律でないが、助詞や活用語の語尾、体言止め、倒置など、音読してとどこおる箇所がない。ちなみに第四章の第一節を引けば、七五を基調としながらやや破調である。

日下江のクサカエ 入江の蓮ハナハチス 花蓮

蓮の花の 美しき

人の盛りを うらやみて

丹摺の袖に 面隠しゝつ

老の涙を 絞りたる

彼の赤猪子が 悲しみを思へ！。

律調については、全九一章三七節を破綻なく運びきったと言ってよいだろう。しかし、抒情詩あるいは叙事詩・劇詩という視点から見たとき、少なからず疑問がわく。

だいいち、長大な連載詩編がなぜ詩集の序として成り立つのであろうか。序というものは本体があつてこそ序であろう。もともと序は漢文の文体の一つであり、一編の最初にその述作の意義を述べるものとされている。短いものとされ、一編の最後にあるものはとくに後序と呼び分けているが、ともに本体あつての序であろう。詩集『心のあと 出廬』はその本体を欠いている。本体を欠いた序がそれでも詩集として成り立ちえたのは、すでに作者にゆたかな詩稿のあることが予想されたうえに、序が序というものの通念を超えて長大に過ぎたからである。足かけ十ヶ月にわたる序であつた。長篇連載の三七〇〇行にあまる序詩を律調に破綻なく押し切った力技は力技として、作者露伴の詩魂のありようが問われなければなるまい。

詩集『心のあと 出廬』の「心之足止緒言」をふたたび引こう。

字を列ねて辞をなし、辞を累ねて文をなすもの、いづれか心より出でざらん。（略）されど此は我が筆のすさびの種々のものの中の、ある一種のものにいと早くより負はしゝ名にて、（下略）

いかにも文字・言辞・文章、いずれか「心のあと」でないものがある。一編の俳句ですら文章でありうるとするならば、ひとり露伴に限らず、「心のあと」というものはもともと短詩を本貫とするものである。「出廬」連載の同じころ、露伴は四行詩の運動を推進していたのである。にもかかわらず序としての『心のあと 出廬』の連載は十ヶ月やむことがなかった。

「出廬」という詩題もふしぎである。出廬をめぐって思念をかさねた末にそうと決心したということであって、草廬の主はべつに出廬という具体的な行動に出たわけではない。そうした重厚な思念をあらかじめ伴うものが出廬というものであるのか。その点では「出廬」に先立つ小説『天うつ浪』も百回で連載を中断され、作中の詩人教師水野もその限りでは海洋小説『天うつ浪』どころか隅田川沿いの書斎の人に終始した。たまたま村童の歌を耳にはしている。同僚の岩崎五十子の病氣快癒のために奔走もしている。とはいえ、あけすけに言ってしまうと片思いであり思念の恋にすぎなかった。「出廬」の主も窓の外をゆく村童の軍歌を聞く。苦舟の歌や若者の歌も耳にする。客詩人との問答があり、わが形わが影の対話もある。それらの問答や対話は、しかし草廬の主の心象を出るものではなかった。心象の揺れ、心象の振幅という意味合いでは結局「心のあと」にはかならない。詩集『心のあと 出廬』は小説『天うつ浪』における詩人水野の「心のあと」の一端でもありえた。それらは、つまるところ露伴「心のあと」の一端として明治三七年の作者その人の詩魂に帰するものであったろう。

してみれば、露伴幸田成行の「心のあと」がその学殖のうながすままに東洋の学芸の世界を居ながらに逍遙し遊戯することは、そのこと自体さまたげられるものではない。しかし、たとえば次のような詩句を説明抜きで当時一般の新聞読者の前にくりだしたのは作品としてどんなものであったろうか。

楊氏の妃・照陽殿（第一篇第五章）

女蝸氏（第一篇第六章）

柳客あり、其の姓は陶（第一篇第十四章）

婆羅門・酥・醍醐（第二章第二十二章）

李太白・巴陵・東籬・淵明（第四篇第四章）

たとえば照陽殿は唐の玄宗皇帝と楊貴妃の故事にちなんだ詩句ではあるが、楊氏の妃という助け舟がなければ読者は一瞬まごつくだろう。女蝸氏のことは『史記』『三皇紀』による。太古の中国における伝説上の天子とされ、女蝸氏との争いに敗れた共工と祝融とが天地をくずしたのをこの天子が五色の石で補修したとされている。いや、詩句にまんざら説明がなかったわけではない。説明という段では、作者自身ときどき詩を説明したり正誤したりしなければならなかったところにむしろ問題があったろう。

昨日の文中「ころく燃ゆる」は「とろく燃ゆる」のあやまりなり。草稿の文字悪きため時々誤謬あり、推読を乞ふ。（明37・4・7『読売新聞』『出廬正誤』）

これは文字の誤植訂正であるが、次のばあいは詩句の正誤に加えて作者からの説明である。

一昨日の紙上、蘇とあるは酥とあらたむ。酥の音は蘇にして、西傍に蘇を配したる文字など、酥と同じ事なれば、蘇にても差支はなけれど、猶酥とするをおだやかなりとす。（明37・4・13『読売新聞』『出廬正誤』）

説明は詩編の趣旨にまで及ぶことがあった。

出廬第三十七章は、窓外に人あり自ら愛国の狂をもつて任じ花鳥風月の情を歌ふ詩人を罵り、ただ軍神の賛として愛国の歌を作らんことを欲する由を云ふところを叙し、第三十八章は廬中の形影これを聞き相顧みて其の放言を驚き且つ怪むおもむきを叙べたり。今載するところは右に接続す。(明37・9・20『読売新聞』「出廬正誤」)

露伴『心のあと 出廬』はそもそもが注釈を要する詩編であつたと見てよからう。『読売新聞』連載中から出版の準備をすすめていたと見えて、年が明けて早々の明治三十八年一月一日付けで詩集が発行され、奥付によればその一二月二六日には三版を迎えている。年内の三版はめでたいことながら、初版から奥付の裏に次のような広告がのつたことはなかなか尋常一様なことであるまい。

近刊 出廬抄注 神谷鶴伴著 是は神谷氏、出廬中の故事出典等を、一々露伴氏に質問し、其の答を得たるを書き集められしものなり。

露伴の学殖は学殖ながら、とくに作者の詩魂にかかわる詩句は、今あげた陶淵明と李太白(第一篇第十五章・第四篇第四章)にあつたように思われる。第十五篇第十五章第二節にはこうあつた。

現身の いふにたらぬを

しみぐと おもひ知りぬる

その日より 我 籠もりける

これの廬に。

ひきつづき第三節には「廬のうしろの 柳しづかに、」とあつて中国は東晋の田園詩人、「五柳先生伝」の陶淵

明（三六五～四二七）を廬の主に寓していたことは、露伴の長詩を読もうとするほどの当時の読者ならいちやく察したことであろう。しかし陶淵明に「形影神」という自問自答詩があったことまで見えていたかどうか。たとえば、その陶淵明という名が第四篇第四章「若き人の言」第五節に再び登場する。

知らずや詩仙 李太白、

巴陵に登り 洞庭の

戦鼓の音を 聞ける日は、

東籬の下に 徘徊タモトホる

彼の淵明を 嘲アザみしを。

太白が盛唐の大詩人李白（七一〇～七二六）の字であることは言うまでもない。が、李白が「陶淵明をあまり好まず、多少馬鹿にしてゐたといふ説」なるものがあつたと受けとる向きもあり、「五柳先生伝」や「形影神」を離れて文学史や故事成語の知識が一人歩きしてしまった感じである。露伴の構想は別にあつたようだ。さきに引いた「出廬正誤」（明37・9・20）を再び引いて詩集（明38・1・1）と付き合わせ、詩集の篇・章・節を括弧内にしめしてみよう。

出廬第三十七章（第三篇第一章）は、窓外に人あり自ら愛国の狂をもつて任じ花鳥風月の情を歌ふ詩人を罵り、ただ軍神の賛として愛国の歌を作らんことを欲する由を云ふところを叙し、第三十八章（第二章）は廬中の形影これを聞き相顧みて其の放言を驚き且つ怪むおもむきを叙べたり。今載するところは右に接続す。

露伴はあきらかに「廬中の形影」の側にあり、李太白と陶淵明とをあげつらった「若き人の言」は「愛国の狂」に属する。李太白と陶淵明とは、士大夫一般の出廬と閉居とを寓しており、東晋の険しい時勢を生き抜いた陶淵明その人の出处進退でありえた。ひるがえって李太白の振幅でもありえた。それは露伴の風流を告げるものでもあったろう。詩集『心のあと 出廬』の勘どころはここにあったようである。しかし、作者みずから詩編の趣旨を説明する――。詩の構造に破綻があったのではあるまいか。

すでに詩集全体を俯瞰したように、第一篇・第二篇の詩魂の揺れは第三篇・第四篇でもおもむきを変えて対話・問答の形をとっている。「心のあと」は抒情詩・叙景詩といった足どりはじめ選びながら、「字を列ねて辞をなし、辞を累ねて文をなす」うちに、いつしか故事成語の世界に逍遙遊し叙事詩のおもむきを呈するに至ったようである。だが、第三篇以後はほとんど劇詩に近い。舞台劇として脚本に堪える構造をそなえはじめ、ことにその第十三章以後は、章名の下にト書きめいた役柄を題として示すまでになった。かりに一言で尽くすならば、露伴の「心のあと」は抒情詩にはじまり叙事詩にあそび劇詩「出廬」に局をむすんだことになるだろう。

このことをあげて破綻と呼ぶならば、破綻は作者が律調をすてきれなかったところに、すでに兆していたようである。そして、そのことはあながち非議すべきことではなかったらう。

露伴の想い描いた詩は肉声を離れることが終生なかったようである。詩は詩歌であり、歌うもの、というよりも謡うものであり、人形浄瑠璃の詞章のように肉声をもって語るに堪えるものであったとおぼしい。それは平生の立ち居振舞いのすぐ右隣に呼吸している営みであり、日常のしつけと相へだたるものではない。音曲に耳の肥えていた幸田家の人びとにとって歌とはそのようなものであったようである。欧米の留学から帰った妹の延にし

でも詞章と音楽とを峻別することは不自然なことであつたろう。オペラや歌曲を思いみるだけでよい。しかし従来の朗誦高吟とは別途に、近代詩の大勢が黙読という方途をえらぶようになったことは、小論の三「近代の詩歌」で見たとおりである。

日本近代詩の栄光と困難とがそのとき約束されたといえるかもしれない。近代日本の詩歌は肉声や音韻を遠ざかり、もっぱら五十音図³¹⁾という仮名文字の体系をよりどころとする音数律³²⁾あいてに悪戦苦闘したように思われる。あえて概括すれば、*thought metre* といいい内在律といい、しばらくは定型詩の周辺を模索する。やがて定型詩から自由詩へ、文語詩から口語詩へ、ついで口語自由詩から散文詩へと展開する。肉声を見失うことによって近代日本の詩歌は肉声の語りや謡いが宰領してきた時間や空間という場から解放されて、想念の尾根から尾根へと飛躍することが可能になった。メッセージ³³⁾を演じることで場面や思念を描写し説明するのではなくて、一つのコードの頂点からただちに異質のコードの頂点へと飛躍し、想念の氷島に生身の詩魂をさらしたようなものであろう。反面、近代日本の詩歌は身体の举措とは別様のものとなり、想念の高みから日常茶飯の地平へ立ちもどる方途を見失ったようである。

六 幻境―我牢獄

さきに露伴が「風流悟」において「恋と名のついたるものは即ち牢獄^{すなはちろうごく}なるか。」とみずからに問いかけたときの設定では「彼女は今は亡し」とされていた。風流の陰しさをともかくにも封じ込めた「夢の化石世界」であり、そうした設定に立って作者は次のように言い切ることができたようである。

此牢獄と名のついたるものは即ち常に、今も存せる彼女と我とが手を携へて逍遙するところの樂園^{らくえん}なり。
牢獄は即ち樂園なり、蛇^{へび}の居らざる樂園なり。

しかし「風流悟」の設定とはうらはらに生活人としての露伴は四年後の明治二八年三月には山室幾美子と結婚し、二女一男にめぐまれた。明治四十一年に幾美子の切り盛りで家も新築でき、その年の京都文科大学の専任講師（教授待遇）は一年で辞している。結果としてみれば「風流」にちなむ小説群から遠ざかり、『心のあと 出廬』をふくむ詩のほとんどがこの時期につくられたことになる。だが、幾美子は明治四十三年（一九一〇）四月八日に短い生涯を閉じ、作者その人が三児をかかえて「風流悟」の境遇に身を置くに至った。では「風流悟」に先立つことになってしまったその一七年の境遇をなんと見たらよいか。

大正元年（一九一二）一〇月に児玉照子（通称八代子）と再婚してからの消息は、露伴自身の「六十日記」にうかがわれ、次女の幸田文、甥の高木卓（安藤熙）をはじめとして伝える資料がある。³⁴ 読者として作家の私生活をことさらあなぐることは限界があり、この主題でもありえない。いっさい省略したい。が、あえて付度すれば、以後の露伴は「我牢獄」の三七年余をみずから魔王として生き抜いた人ではないかと思われる。

「我牢獄」とは、透谷の旧作「我牢獄」のことである。透谷の「我牢獄」が『蓬萊曲』（明24・5・29出版）よりあと「厭世詩家と女性」（明25・2・6、20）よりも前のあたりの作とこんにち推定されるかぎりでは、「我牢獄」発表時（明25・6・4）の透谷はみずからいう「旧作」としての「我牢獄」の境遇に、すでにいなかったのかもしれない。が、亡き透谷の提起した「我牢獄」は、かりに露伴の「風流悟」を形だとすればその影にあたるものではなかったか。

いったい「我牢獄」発表当時の透谷は、その短い生涯のどのあたりを疾走していたのだろうか。諸家がいう七年ぶりの南多摩川口村への再訪と秋山国三郎・大矢正夫との再会（七月下旬）、そして雑録「三日幻境」（八月・九月）がその境涯にかかわっていたろう。ただし、三多摩の自由民権運動から離脱して七年たっている。その七年ぶりの再訪と再会とを八月・九月にかえりみて雑録の表題に「三日」といい「幻境」と記しつけた。⁽³³⁾「三日」も「幻境」も手放しの言葉ではなく、けっこうくめの言葉ではない。川口村森下の豪農秋山老に「日頃無口の唇頭を洩れて」文中つぎのように語り始めたという懺悔と対比させても、どこか異様である。

この過去の七年、我が為には一種の牢獄にてありしなり。

過去の七年とある以上、老畸人秋山国三郎にその夜透谷が語ってやまなかったという牢獄なるものは、石坂美那との恋愛と結婚をふくむ七年でありえたのであり、次にみるような「我牢獄」の境涯とたしかに地続きではあった。

我が無風流は牢獄の中に捕繫せられて然る後に恋愛の為に苦しむ、我が牢獄は我を殺す為に設けられたり、しかし、雑録「三日幻境」を記したときの透谷は秋山老人の侠骨と事業と風流に一目も二目もおきながら、すでに別の境涯にあったと思われる。七年前にみずから失った自由の境涯が「幻境」であったと知れば知るほど、透谷としては「我牢獄」に身をやつして秋山老とは別様の風流観にまみれるほかない。ここに至って透谷の「幻境」と無風流とはようやく透谷その人の文学となりえ、かれ自身の風流観として立ち上がったようである。

すなわち「風流」（明25・12・1『青年文学・鳳雛』⁽³⁴⁾）がそれであり、「風流」が執筆されたと推定される同年四・五月ころの境涯である。それらが、旧稿「我牢獄」をあえて発表した六月四日という日付にかかわって改め

て顧みられる。「風流」一編は冒頭ただちに問いかける。「何をか風流と云ふ。吾之を疑ふ。」そう問いかけておいて、噴き出る落想を矢継ぎ早にくりだして自答をかさねたあげく、次のような比喻をもって頓挫した。

吾之を山中の老僧に問ふ、老僧笑うて答へず、適^{たま}歩^{たまたま}下^{てんでん}に転^{てん}転^{てん}する一蚯蚓あり、指点して云く、風流是哉。

『蓬萊曲』（第二駒第二場）や「地龍子」「みゝずのうた」など、「風流」に自足するミミズという小動物が透谷の作品にしばしば登場することは、諸家の指摘するところである。³⁷⁾しかし透谷の風流を露伴の風流と背反するものであったと言ひ切ることはむずかしい。さきに小論の四「風流悟——魔王」で見たように、露伴の「井上通泰子よ」は身を小禽微虫にたとえながら古帝王の痴にちかい大丈夫の気概を告げていた。透谷の「風流」は露伴のその「井上通泰子よ」の一節にちかい。逆に透谷死後の『文学界』編集子によせた露伴の書簡「新牀詩に付て」は、亡き透谷の「人生に相渉るとは何の謂ぞ」（明26・2・28）における次の一節にちかいものがあつた。

悲しきLimitは人間の四面に鉄壁を設けて、人間をして、或る卑野なる生涯を脱すること能はざらしむ。鵬の大を以てしても蜩^{せみ}の小を以てしても、同じくこの限を破ること能はざるなり。而して蜩の小を以て自らその小を知らず、鵬の大を以て自ら其の大を知らず、同じく限に縛せらるゝを知らず欣然として自足、憫れむべき自足なり。

露伴のことにもどうう。幾美子にささえられた一七年は、今日かえりみて露伴その人の「幻境」であつたのかもしれない。ことによると透谷がいう「自足」の気味あいさえ伴っていたかもしれない。陶淵明の村居をおもわせる境涯がそのころの短詩評や連載詩集『心のあと 出廬』を中心に展開していたからである。

木鶏という作者の四行詩「巽^{たつみ}」と露伴の評とをあげよう。

山伏す。水ゆく。里は静。^{しずか}

鶏鳴く。^{とり}犬吠ゆ。^{ちまた}巷深し。

天下太平、君が代の春。

村老の髯 あゝ長し。

（体十三。五五七、五五七、七七、七五調）

初二行、陶詩より出たるは疑ふべからざるも、言葉のつかひざま、声の配りかたに、苦心の効^かはみえて、勁健愛すべし。

友人遅塚麗水「夜泊」の初め二行は露伴の評のとおりであろうが、なお陶詩を思わせる。

蘆に泊り 蘆を焚き

月に汲み 月を煮る。

第一行第二行、軽々に夜泊の趣を道破し去りて、辞寡く意多し。感服。

律調の工夫は、次の四行詩および短詩評にもうかがわれる。

茅花野^{つばなの}に 茅花抜きにと 人の往きて

帰らぬ軒に 春雨の降る。

軒先の 籠の鸚鵡の つくり声、

君よくと 幾度^{いくたび}も云ふ。

（体九。五七五、七七、五七五、七七調）

その地の別荘の美しき姫君の、猶田舎めづらしくて遊びに出でたまひたる後の春の静かなる風情、眼に見ゆ。三十一文字歌を二章聯ねて複雑なる情景を云ひあらはせる工夫もまた甚だ妙なり。

また、和歌や漢詩の言葉でいいえぬところを軽々に言い得てはなはだ佳趣あり、と評された久保田世音「京の水」、

水上は 早鮎取り得て、

白栲を 雪とぞ晒す。

鴨川の 四条五条、

橋の下ゆく 白粉の水。

「艶麗婀娜、殆ど人を魅せんとす。才調おそるべしく」と評された水島巴箋の短詩。

語る野崎に お染のやうな

女大夫の 口紅とけて

春の夜更けし 絃の音、

戸外にやしとく 雨が降る。

詩の材は海外にまでおよび「南加利弗兒尼海水浴場」(田村松魚)のようなものもあるが、「怨」という題の大野若三郎の四行詩と露伴の評に注意したい。

大君の 御言畏こみ 夷討ちにと

ゆきましゝ 夫は帰らず、帰らぬもよし、

大君の 御言のまゝに 夷打ちにと、

ゆきましゝ 此旅なれば 帰らぬもよし。

（体十四。五七七調）

一 怨恨の文字を着けずして悽愴の意おのづから見ゆ。

友人や門下生の作はおおむね伝統詩の埒内で詞藻に腐心した。露伴の限界がそこにあったとする立場もある。が、「募集当選の分」の中には異質のものが兆していたようである。⁸⁸

砂漠ゆく 尻無し河の

又出でゝ 走るが如く、

君に逢ひて 昔の血潮

あやしくも 胸を流るゝ。（柳南）

また、「戦前」と題する作。

驢に乗りて 行くは 誰が女ぞ、

驢を追うて 行くは 其の夫か。

さく女郎花おみなめし（マメ） さく野を後に

軍避けいくさ 山に住まんと、ゆくか妹背の。（於満洲 小牧如城）

七 音幻

音は幻である、という考えは年来のものであったと露伴は『音幻論』（昭22・5・30）の「序」で語っている。未来の著書目録、いわば材料収集の目安書きともいふべき文字を書斎のガラス障子の上に墨でしたためておく風変りな習いが露伴にはあって、文壇ではちょっとした話題になっていたらしい。その目安書きの一つに「音幻」という二字があったというから、「音幻」についても露伴は他の文字と同様、かねて諸種の雑書や材料の仕込みに手間ひまをかけ費用を惜しまなかったようである。

さしあたり急なことでもないから、仕事にとりかゝる時の有力なる材料として、零細的に書きしるして置いたノート類の外に、国語の排列の仕方に関一種の考案を用ゐた、半紙本十冊にも余る字引のやうなものを、甥の四郎といふ者に託してつくつて置いた。

ところが、

東京の住ひは灰燼に帰して、甥につくらせた字引も烟となつてしまつたので、徒に筆者の労苦を致したが、その結果に於いて、半部以後のものは余の当初の考へとは違つて、万事物足りなさを感じるけれども、どうにかかうにか一部をなしたのはこれである。

筆者の労苦、とは「土橋君」、後に自身が『幸田露伴』を口述することになった土橋利彦（筆名鹽谷賛）をねぎらった言葉であり、ガラス障子に記しつけた他の目安書きもそれぞれ『蝸牛庵聯話』（昭17・1・25、中央公論社）の項目その他となつて露伴という大蔵海に氷上の一角をみせたようである。蝸牛庵に仰臥して口述する年老いた雷音洞主、かわりあつた人びとの労苦はなにも「音幻」に限るものではなかつたろう。

それにしても、露伴が「音幻」という二字で温めていた主題とはどのようなものであったろうか。露伴はいう。言語学その他で諸先輩が色々な優秀なる意見を披瀝してゐられたのと別に、それとは少しく異つた考を余は早くから有してゐて、いつかはこれを世に問ひたいと思つてゐたからであつた。純粹に音の上から言語文章の大きな問題を生じること意識してゐたので、

と告げる。「音は幻である」という露伴独特の言語観・文章観は、いまとなつてはその一斑を『音幻論』によつて垣間見るほかない。由来するところは遠く、六〇年前の文壇登場当初の「音と詞」（明22・1）にまでさかのぼるようである。二五年余の生涯を疾走して去つた透谷にくらべるならば、「明治五十年観」どころか、八〇年の露伴の歩みは長かつた。長すぎた。

いま『音幻論』の吟味それ自体は当面の主題ではないが、「言語」をいわゆる音声言語にあて、「文章」をいわゆる文字言語に振り分けていたことに注意したい。『音幻論』の結びとなつた「擬音」の末尾を露伴は次のように授けていたのである。

各国の文法・語法の研究はされてゐるが、支那では字法、世界的には声法といふものが研究されねばならぬ。字法は擱くが、声法といふ一科が立てられて、人類声韻の変転推移の法則が研究され見出されて、そして古今世界の言語を横に貫き縦に統べるに至るのではなくては、人類言語の完全な了解は得られぬ。

露伴の「言語」は詩と同様、ついに肉声を離れることがなかった。耳と口むろの感性に即するかぎり、「言語」はいわゆる音韻に近いものとなり、出来合いの五十音図の字面で律することができなくなる。口むろと鼻むろ、唇・歯・歯ぐき・舌・口蓋垂、それら構音の微妙な遷移および時代の変転推移と地域の位相とに思い至るとき、

はじめて露伴の「音幻」に参入することができるのではあるまいか。さしあたり目次の項目をあげよう。

声音を記する符、韵、音の各論、シとチ、近似音、本具音、ン、聯音、類音、対音、省音、添音、倒音、

擬音

すでに露伴独特の用語である。「符」はいわゆる記号、「韵」はいわゆる母音、「音」はいわゆる子音をさしている。ページ全体の半ばちかくを占める「音の各論」が昭和二〇年という、敗戦の年の二月・三月・六月・八月・一〇・十一月の六回にわたって仰臥のまま口述され、あいついで雑誌に掲載されたという事実をいまどう受け止めたらよいものか。「音」（子音）にかけた露伴の執念に感じ入るべきか、戦局をよそにかような閑文字がまかり通ったことに驚くべきか。すべてが『幻談』（小説集、昭16・8・20）であり「音幻」であり「幻境」であったのかもしれない。空襲と疎開と被災とあいつぐ転居をぬって関係者は口述を活字にのせ、引きつづき本にまとめることを急いだようである。

その一方で芭蕉七部集評釈の完成を急いでいたことも年譜に即けば明らかである。まぎれもなくそれは露伴の詩の世界に属することであった。しかし、露伴〈七部集評釈〉はそれ自体が「風流」にかかるわるいま一つの世界であり、独立した主題を形成する。

注

(21) 小田切秀雄編『北村透谷集 明治文学全集29』（昭51・10・30、筑摩書房）

勝本清一郎編纂・校訂・解題『透谷全集 第一卷』（昭25・7・15、岩波書店）・『透谷全集 第二卷』（昭25・10・30、岩波書店）・『透谷全集 第三卷』（昭30・9・10、岩波書店）

色川大吉『新編明治精神史』（昭48・10・25、昭50・1・30七版、中央公論社）「第一部 民衆の精神動態——伝統型の文人思想——秋山国三郎 三「三日幻境」の評価をめぐって」

小澤勝美「事実と虚構——富士山遊びの記憶」2『北村透谷 原像と水脈』（82・5・15、勁草書房）

川崎司「透谷年譜」「透谷と近代日本」（北村透谷研究会／桶谷秀昭・平岡敏夫・佐藤泰正、94・5・16、翰林書房）

笹淵友一『北村透谷』（昭25・7・20、福村書店）

坂本浩『北村透谷——自由と平和、愛と死——』（昭32・8・20、至文堂）

笹淵友一『浪漫主義文学の誕生』（昭33・1・10、明治書院）

笹淵友一『「文学界」とその時代 上』（昭34・1・15、明治書院）

安住誠悦『浪漫主義文学』（昭44・1・15、北書房）

平岡敏夫『北村透谷研究』（昭42・6・30、有精堂選書4、有精堂）

平岡敏夫『続北村透谷研究』（昭46・7・20、有精堂選書22、有精堂）

佐藤泰正「北村透谷集解説——近代文学の源流たることの意味」『近代日本文学大系 第9巻 北村透谷・徳富蘆花集』（昭45・8・25、角川書店）

佐藤善也「北村透谷集注釈」『近代日本文学大系 第9巻 北村透谷・徳富蘆花集』（昭45・8・25、角川書店）

日本文学研究資料刊行会『北村透谷 日本文学研究資料叢書』（昭47・1・1、有精堂）

東郷克美「解説」『北村透谷 日本文学研究資料叢書』（昭47・1・1、有精堂）

藪楨子『透谷・藤村・一葉』（91・7・10、明治書院）

平岡敏夫『北村透谷研究 第四』（93・4・9、有精堂）

- 色川大吉『北村透谷』(94・4・25、東京大学出版会)
- (22) 榎林湜二「北村透谷と幸田露伴―北村透谷における虚と実・序―」(昭51・3・1、『文教国文学』)
- 本間久雄「露伴と『文学界』」(昭24・12、『露伴全集月報』第七号、岩波書店)
- 注(21)色川大吉『新編明治精神史』(昭48・10・25、昭50・1・30七版、中央公論社)第一部 4「六 農民救援と透谷―社会革命的終末観の源流―」
- 小澤勝美「透谷と秋山国三郎―龍子句集「安久多草子」の刊行によせて―」(74・3・1、『^{ふらいぶ}5』5)
- (23) 「般若心経第二義注」(『露伴全集』第四十卷、明23・8・30と推定、斎藤八郎(紫影)筆写)
- (24) 勝本清一郎「風流」解題」(『透谷全集 第二卷』勝本清一郎編纂・校訂・解題、昭25・10・30、岩波書店)
- (25) 注(21)小澤勝美『北村透谷 原像と水脈』(82・5・15、勁草書房)
- 注(21)川崎司「透谷年譜」『透谷と近代日本』(北村透谷研究会／桶谷秀昭・平岡敏夫・佐藤泰正、94・5・16、翰林書房)
- 堀内功夫「透谷「風流」―執筆年月」(『池坊短期大学紀要』第一〇号、昭55・3)
- 明治二五年五月一日『文学雑誌・葦分船』(第一次)第二号(薰心社刊)に同年同月二〇日刊『文学雑誌・あづまにしき』第壹号の広告が掲載の由。
- 平岡敏夫「『富士山遊びの記憶』と『甲州紀行』」(『稿本近代文学 特集・北村透谷』第一集、昭53・9)
- (26) 注(2)柳田泉『幸田露伴』(昭17・2・16、中央公論社)
- (27) 『心のあと 出廬』(初版―明38・1・1、第三版―明38・12・25、春陽堂)
- (28) 諸橋轍次『大漢和辞典』(昭59・10・20修訂版第一刷、大修館書店)第四卷によって明の徐師曾『文体明辯』を引く。「按、爾雅云、序、緒也、字亦作^レ叙、言^下其善叙^二事理^一次第^一有^レ序、^中若絲之緒^上、」
- (29) 長与善郎「露伴に訊ねたかったこと」(『心』昭25・7・1、日本評論社)
- 鹽谷贊『幸田露伴 上』(昭40・7・30、昭47・1・20再版、中央公論社)「出廬」
- (30) 高木卓『人間露伴』(昭23・6・5、丹頂書房)「露伴の片鱗」
- 昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書 第六十一卷』(昭63・10・5、発行―昭和女子大学近代文学研究所)

「幸田露伴」五「遺族・遺跡」

- 藍川由美『これでいいのか、にっぽんのうた』（文春新書、平10・11・20、文芸春秋）第二章「日本語の発音」
- (31) 馬淵和夫『五十音図の話』（93・7・1、96・2・1、大修館書店）「五 平安時代の音図―明覚以後 明覚の五十音図」に拠るが、その注を引く。「明覚およびその著者・学説については、拙著『日本韻学史の研究』『悉曇字書選集第二巻』に詳しい。」

- (32) 九鬼周造『文芸論』（41・9・1、75・11・20再版、岩波書店）「日本語の押韻」

菅谷規矩雄『詩的リズム 音数律に関するノート』（75・6・30、92・6・5再版、大和書房）吉本隆明「跋」

松浦友久『リズムの美学―日中詩歌論―』（91・3・20、明治書院）

北川透『詩的レトリック入門』（95・8・1、思潮社）「余白論の試み」「詩と散文のあいだで」「詩形論の試み」

松林尚志『日本の韻律―五音と七音の美学』（平8・4・6、花神社）

坂野信彦『七五調の謎をとく―日本語リズム原論』（96・10・1、97・1・20再版、大修館書店）

- (33) R・ヤーコプソン『一般言語学』（共訳・川本茂雄・田村すゞ子・村崎恭子・長嶋善郎・中野直子、73・3・15、みすず書

房）「第一部 一般問題 II 言語の二つの面と失語症の二つのタイプ II 言語の二重性格」

- (34) 幸田文『幸田文全集』第一巻（94・12・9、岩波書店）I「父」「こんなこと」、II「雑記」「終焉」以下

青木玉『小石川の家』（94・8・24、講談社）「叱られる種」「長唄」「棕の木」

高木卓『血と血』（小説、昭23・11・15、八雲書房）第一章六・第二章二

- (35) 北川透『北村透谷■試論〈幻境〉への旅』（昭49・5・25、昭51・8・25初版第二刷、冬樹社）「〈幻境〉への旅」「みゝずのうた」

- (36) 注(21)川崎司「透谷年譜」「透谷と近代日本」（北村透谷研究会／桶谷秀昭・平岡敏夫・佐藤泰正、94・5・16、翰林書房）

注(21)堀内功夫「透谷「風流」―執筆年月」（『池坊短期大学紀要』第一〇号、昭55・3）

注(21)小澤勝美「事実と虚構―「富士山遊びの記憶」2」（『北村透谷 原像と水脈』（82・5・15、勁草書房）

注(35)北村透『北村透谷■試論〈幻境〉への旅』（昭49・5・25、昭51・8・25初版第二刷、冬樹社）「〈幻境〉への旅」「みゝ

ずのうた」

(37) 勝本清一郎『近代文学ノート 2』(79・11・15、みすず書房)「透谷の逸作ついに出現 風流」(60・10『文学』所載)

注(24)「風流」解題」(『透谷全集 第二卷』勝本清一郎編纂・校訂・解題、昭25・10・30、岩波書店)

(38) 注(21)笹淵友一『浪漫主義文学の誕生』(昭33・9・10、明治書院)「第六章 幸田露伴―キリスト教的浪漫主義―」および同書に引く太田正雄(木下幸太郎)「露伴管見」(昭13・6・1『文学』六の六、岩波書店)など。

日夏耿之介『改訂増補 明治大正詩史 卷ノ上』(昭23・12・20、東京創元社)「第二篇 浪漫運動 第二章 浪漫後期 第七節 詩壇本部の展開」

「頭注 綱島梁川」彼の四行詩の試みも、三十八年中「読売」に発表されたが同じ失敗に陥ってしまった。爾来彼は詩に黙した。彼は散文によつて十分詩を語る詩人である。

(39) 鹽谷贊『幸田露伴 下』(昭43・11・9、中央公論社)「大患」「蝸牛庵聯話」

小林勇『蝸牛庵訪問記』(56・3・10、岩波書店)「鎌倉・子供」

(40) 『蝸牛庵聯話』(昭18・1・25、中央公論社)「芭蕉、利休の食單」「張俊供進御筵食單」は「単」とかわり、総二七〇ページ中の一九五―二六九ページにわたっており、同書の四分の一強を占める。「単」は、いわゆるメニューの意。

(一九九九・一・一七)